

「すべての民をわたしの弟子にしなさい」

マタイによる福音書 第28章16節～20節

説教 村上修平牧師

愛する皆さんとご一緒に礼拝ができることを楽しみにしていました。今日は久しぶりにお会いする方も、新しく来られた方もいらっしゃるようです。こうして神さまによって集められ、ここで神さまの言葉を聞いて、ご一緒に礼拝できることは素晴らしいと思います。

今日、私たちは聖書の御言葉を聞きました。イエス様の「大宣教命令」と呼ばれる箇所です。イエス様のことを伝えることを『伝道』と言います。イエス様のことを語り出したら自然に喜びが溢れてきて、『ああ本当にイエス様に救われて嬉しい。神さまの恵みって本当にありがたい』と思っているその人を、周りの人が見ていて『ここには何かある。私もこれを知りたい。見てみたい。信じたい。この人がこんなに喜んでいんだから、きっと良いものに違いない』と思って、神さまのもとに集まって来る。これが『伝道』じゃないかと思えます。今日、私たちもこの礼拝に集まってきました。もしかしたら中にはあまり気が進まないという思いを抱えながらも、ここにいらっしゃる方がいるかもしれません。そういう方々に神さまがこの礼拝の中で触れて下さって、『やっぱりここには何かあるな。本当に神さまっておられるな』ということを感じられるように、お祈りします。

よみがえられたイエス様と11人の弟子たちがお会いする場面が描かれています。あの十字架の上で息を引き取られ、墓に葬られたイエス様が、よみがえって、今、目の前におられる。弟子たちはとても嬉しかったと思えます。「イエスに会い、ひれ伏した」(マタイによる福音書28章17節《新共同訳》)とあります。『ひれ伏す』というのは『礼拝する』という意味もあります。イエス様を礼拝しているけれど、「しかし、疑う者もいた」(17節)と書いてあります。どういことでしょうか。目の前にいるイエス様を見て、心に本気にする人ができない人がいたということです。想像してみると、弟子たちはあまりにも悲しいことがあって、その落ち込みが深かったために、嬉しいことに出会っても、すぐには喜びを心から受け止めることができなかったのかもしれませんが。

この『疑う』という言葉は、『心が二つに分かれてしまっている』という意味があります。一方では神さまを信じたい気持ちがあります。で

も、もう一方では私たちの現実の問題があります。私たちの前に立ちただかる壁、悲しみだったり、恐れだったり、疑いだったり、そういうものでいっぱいになって、なかなか神さまを信じることができない。この『心が二つに分かれた状態』を『疑う』と言います。どうでしょう。私たちの中にも、いつもそのような二つの心があるのではないのでしょうか。神さまを信じたい思いと、信じ切れない思いと。それでも、今日ここにいらっしゃる方たちは、その二つの心がありながらもやっぱり神さまを信じたいと、そう思って集まってきたのだと思えます。心の奥底には小さいけれども本当の信仰がある。神さまが与えて下さったその信仰に、イエス様は触れて下さいます。イエス様は、私たち近づいて来て、『何を恐がっているんだ。わたしが一緒にいるじゃないか』と言って、私たちをいつも助け起こして下さいるのです。

実は、私自身も『伝道』ということをしんどく思うことがあります。そもそも、そんな大きな使命が私にできるのか怖くなります。人が集まらなかったらどうしよう。聞いてくれなかったらどうしよう。集会の度に不安になります。先週の金曜日の夕方もそうでした。これからバイブルスタディーが始まるという時に雨が降り出しました。この雨の中、聖書の勉強をしたいと思う若い人がいるだろうかと、不信仰なことを思ってしまい、色々考えたら不安になりました。そこで、私は神さまに祈りました。そうしたら肩から力が抜けて、すごく楽になって、そして、『すべて重荷を負うて苦労している者はわたしのもとに来なさい』、『何をあなたは心配しているんだ。大丈夫!』、というイエス様の御声が聞こえてきました。そしてふたを開けてみたら、いつもは細々と続けている会に14人も若い人たちが集まったのです。ああ本当に私じゃない。雨が降ろうが槍が降ろうが、イエス様は『この人に伝えたい』と思ったら、その人を連れてくる。私はただ語れば良いだけだと分かりました。イエス様は本当に生きておられて、私たちの祈りに応えて下さる方です。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(20節)。この約束を信じて、この一週間、私たちも力強く歩ませていただきたいと思えます。

(記 説教要約奉仕者)